

幽霊が出たので お供え してみた

とほえず

地球

挿絵

羽鳥ぴよこ

試し読み版

第一章	幽霊アパートでの出会い	006
第二章	幽霊とのラブラブ(?)生活	053
第三章	大家さんと幽霊	101
第四章	霊子さんとのイチャイチャ生活	142
第五章	座敷童との出会い	186
第六章	ムチムチとロリとの退魔的な生活	263
番外編	着飾ってみて	293

登場人物 紹介

かこい
船子さん

川路の部屋に現れた巨乳の女幽霊。あまり喋れないようにリアクションも薄いが、エッチには過敏に反応してしまふ。



シキ

見た目は幼女だが中身は〇百歳超えのロリ姿幽霊。何やら川路を殺そうと企んでいるみたいだが……？



かわじ
川路

いわくつきアパートに住む男子大学生。性欲が強く、幽霊相手にもお構いなしにエロいイタズラを仕掛ける。

第一章 幽霊アパートでの出会い

「おい、川路かわじー！」

大学の食堂で飯を食っていると、大きな声で名前を呼ばれる。なんだよと思って目を上げれば、それなりに仲良くやっている友人の一人が立っていた。

「悪い、一緒に食わせてくれね？ 人が多くて席全然空いてなくてさー」
彼の言う通り周りを見渡せば、確かに人がいっぱいだ。

「まあ、昼時だもんな。仕方ないだろ」

そう言っつて、俺は目の前の空いている席に座るようジェスチャーを見せる。

すると、彼は笑ってそこに座り、学食を食べ始めた。会話の中身としては、あの教授の講義が楽だとか、レジュメを融通してくれとか、実に大学生らしい内容である。

そんな話を続けていると、彼はふと思いつたように目を向けてきた。

「そうそう。川路、合コン来ない？ 結構可愛い子が来るらしいぞ」

可愛い子、という言葉にどうしても身体が反応してしまふ。

やはり、大学生というのは華のキャンパスライフを送るために異性は必要不可欠である。もちろん、俺だって可愛い女の子が大好きなので、今までそういう出会いの場は積極的

に参加していたのだが……。

「あー……いや、俺はいいや」

今の俺には必要ない。そう考えて拒絶すれば、驚いたようにこちらを見つめてくる。

「珍しいなあ。お前、女の子好きだろ？」

「女の子……ってか女体かな、好きなのは」

「最低かよ！」

ゲラゲラと笑いながら肩を叩いてくる。

別に本当にそう思っているほどクズではない……が、肉体関係のないお付き合いがしたいのかと言われれば、それは首を横に振ってしまう。人より性欲が強いきらいのある俺は、やはりそういう淫靡いんぴな関係というのも抗いがたいのだ。

「で、なんか用事あるのか？」

俺が断ることが珍しいのか、一歩踏み込んで聞いてくる。

まあ、別に隠すようなことは何もないので、答えてやってもいいのだが……。

「うーん……用事っていうか……わざわざ女漁りめさをする必要がないというか……」

なんと答えていいのかわからず、答えを濁してしまう。

それを、良い思いをしているから隠したがっていると勘違いしたのか、友人はさらに聞いてくる。

「つかー！ 羨ましいなあ。どこの子だよ？」

ギラギラとした目を向けてくるので、まさか俺が女子大の子と付き合っていると思っ
ているのだろうか？

いや、憧れを抱くのは理解できるが……これで肯定すれば、絶対に紹介してくれと言っ
てくるだろう。残念ながら、違うのだから紹介しようがないが。

「どこ……俺の借りてるアパートの子、かな……」

「えっ……？」

素直に答えてやれば、啞然とした表情を浮かべる友人。

なんだ？

「あ、あの幽霊アパートか!? つてか、お前以外にあんな不気味なとこ住んでる奴いたの
かよ!？」

「不気味って……お前なあ……」

失礼な奴だ。俺が今も住んでいる場所を、そんな風に言うなんて。

まあ、事実だから反論のしようがないが。

「だって、事実だろ!! 見た目クツソボロボロだし、靈感まったくない俺でも近づくと
嫌になるし、近づいたらすっげえ寒いし、身体が震え出すし……!!」

「そうかあ？ 別に大したことないと思うけどなあ……」

実際に震えて見せる友人は大げさすぎだと思う。ここは冷房も効いていて涼しいが、震えるほどではないだろう。

なんでもないように答える俺を見て、呆れたような目を向けてくる。

「お前、本当馬鹿か肝っ玉据わってるよな。普通、いくら安くてもあんなところ入らないって。家賃いくらだっけ？」

「月50円」

「やっぱいだろ!! もう絶対何かありましたと何かありますが組み合わさってるじゃん!!」

過去と現在進行形と言いたいのだろうか？

しかし、いいところだと思う。

このご時世、大学の近くに50円で住まわせてくれる場所なんてあるだろうか、いやないだろう。

まったく……人に取られる前に、いいところを見つけられてよかったぜ。

「ヤバイ噂も聞かぜ? そのアパートで死んだり行方不明になった奴が何人もいるとか、お祓はらいに来た人が呪い殺されたとか……」

「マジかよ」

「軽いなあ……」

友人はそう言うが、俺は内心結構驚いていたりする。

そんな実害があるとは言われていなかったぞ。入居する時、「これだけ安いんだから……分かってるだろ？」みたいなことは言われたけど。

「マジで幽霊とか出ねえの？」

ケラケラと笑いながら聞いてくる友人。俺はそれに正直に答えてやることにした。

「うん？ 出るぞ」

「あー、やっぱりそんなハッキリしたもんは出ないか………出るの!!」

立ち上がって机をバンと叩くので、俺も震えてしまった。

「お、おお。なんだよ、いきなり大声出すなよ、ビビるなあ……」

少し上がった心拍数を元に戻そうと努力する。

……あ、元に戻った。

「普通れいこにしているお前にビビるわ!! 幽霊出るのになんで平然としてんだよ!!」

「霊子れいこさんだぞ」

「名前も付けてんのかよ!!」

友人は焦った表情を浮かべながら、俺に顔を近づけてくる。

やめる。そっちの趣味はない。

「馬鹿かよ、お前! さっさと出ろって! 危ないじゃん! なんだったら、俺の部屋に

ちよつとなら住まわせてやってもいいからさ！」

彼の顔を見れば、本当に俺のことを心配してくれていることが分かる。そんな友人には、真実を話しておく必要があった。

俺はこつそりと声を潜めて話し出す。

「いや、それがな……」

「な、なんだよ。もう呪われてるとか言うなよ……?」

少しビビりながらも、友人も俺に合わせて声を小さくしてくれる。そんな彼の目をじつと見つめながら、俺は口を開く。

「その霊子さん……」

「……ゴクリ」

喉を鳴らす友人。

「すっげえエロいんだ」

「詳しく聞かせてくれ」

一瞬で椅子に深く腰掛け、両手を組み合わせながら両肘を立てるといふどこぞのアニメで見たスタイルになる友人。

は、早い……。

「あー、でも結構前からだから、一から話すと長いぞ？」

「気にすんな。エロは単位に勝る」

「お、おお……」

講義をダシにして逃げようとしたが、友人は話すまで決して俺を解放するつもりはないようだ。

まあ、俺も自慢したいという気持ちもあったので、大人しく話すことにする。

「あれは、俺が入学するちよつと前の話だ」



「おお、ここが……」

俺は肩にバッグを担ぎながら、目の前のアパートを見上げていた。

なんとというか……ポロイな。二階建てのどこにもでありそうなアパートの作りなのだが、木造の外観は薄汚れている。部屋によっては修理が必要ありそうなくらい、壁がポロポロだ。カラスが屋根に止まってギャアギャアと鳴いていることも、非常に不吉である。人の気配もまったくないのが、その不気味さを際立たせている。

いや、家賃が50円という破格の値段を思い出せば、これも当然なんだろうけど。

「……君が川路くんかい？」

ボーっとアパートを見上げてみると、陰気な声をかけられる。振り返れば、なんだか疲れ切ったような中年の男が立っていた。

「あ、そうです。大家さんですか？ よろしくお願ひします」

「ああ、どうも。……しかし、普通の学生さんみたいなのに、どうしてこんなところに……俺もここには住んでいないよ？」

……まるで、わけありの人が借りるような言いぐさ。別にどうでもいいんだけど。

しかし、大家さんも住んでいないというのは驚いたなあ……。確かにポロそうだが、住めないということはないだろうに……。

「そうなんですか？ やっぱり、50円っていう安い家賃に惹かれて……」

「いや、普通は来ないと思うんだけどね。法外なくらい安いし。まあ、俺からすればありがたんだから、いいんだけどさ……」

明らかに事故物件ですもんね。俺はそういうの気にしないタイプだから家賃を見て飛びついたので、気にする人は敬遠するだろう。

しかし、学費も自分で払わなければならない苦学生にとっては、この家賃の安さはどうしても抗えない魅力があった。

「君、良い子みたいだから忠告するけど、本当に我慢できなくなったら逃げるんだよ」
「はい？」

不思議なことを言う大家さんに首を傾げる。

「戦おうと思ったり、抵抗しようと思ったりしたらダメだ。ただ、逃げるんだ。それなら……まあ死ぬことはないだろう」

「はぁ……」

まるで、悪霊が出るような言いぐさに内心笑ってしまふ。俺はそういう存在を、あまり信じていないからだ。

といつても、絶対にいないとは思っていないので……微妙に否定的という立場だ。

だって、一度も見たことがないから。

「じゃあ、頑張りなよ。君以外に入居者はいないから……契約した部屋以外も自由に使ってくれていいよ。こんなところ、誰も来ないからね」

とんでもないことを言つて、大家さんは俺に鍵を渡してどこかに歩いて行つてしまった。

……え？ 本当に全部の部屋使つてもいいの？

といつても、荷物とかもそんなないから使いようがないんだけど……。

「……本当に住んでないのか。不思議だなぁ……」

とりあえず、荷物を部屋に置きに行くでしょう。俺は誰もいないアパートに、一歩踏み出したのであつた。

……誰かの視線を一身に受けながら。

部屋の中は、外観と同じように決して綺麗なものではなかった。

……が、大学生の住む安い部屋といえば、大体こんなものだろう。風呂とトイレが別々に備え付けられているだけでも満足だ。一体化しているやつは本当に無理。

少し狭く感じるが、俺はあまり家具も持ってきていなかったもので、暮らすには十分である。壁も薄そうだが……俺以外に誰も入居していないのだったら、騒音に悩まされることはない。

……結構良い部屋取れたな、俺。

「いやあ、本当に俺一人だけなのか。月50円でこんな良い思いしてもいいのか？ 一城の主になってしまったなあ……」

飯も食って腹を膨らましたので、急に眠たくなってきてしまう。荷解きも大した量ではなかったが、それでも身体は疲れているのだろう。

誰もいないはずなのに、部屋の中で俺以外の気配もするが……まあ事故物件だし当然か。俺はとくに気にせず、布団を敷いた。

「荷解きして疲れたし、今日はもう寝るか。おやすみー」



目を瞑ると、すぐに眠気が襲ってきた。

やはり、ヤバそうな場所でも人は簡単に寝られるんだなあ、なんて考えながら俺は眠りにつくのであった。

「……ん？　なんか寒い……？」

しかし、ひんやりと身体が冷えるので目が覚めてしまった。

まだ夏には遠いとはいえども、最近はや暖かくなってきたような気がしていたのだが……。そんなことを考えながら、寝ぼけ眼で臉を上げると……。

「おお……出た……」

枕元に、女が立っていた。

大家さんは、このアパートには俺以外入居している人はいないと言っていた。大家さん自身も住んでいないと。

……やっぱり、俺以外がいるのっておかしいよな。

いや、もしかしたら大家さんの間違いで誰かが入居していたということもあり得るだろうが、俺の部屋にいるというのはおかしすぎる。

ちらりと玄関の扉を見れば……うん、鍵はちゃんとかけられている。

「……じゃあ、やっぱり幽霊だよなあ」

ああ、驚いた。こんなに幽霊ってハッキリ見えるものなのか。今までそうだったものを



見たこともなかったので、ちよつとした感動すら覚える。

「えーと……」

枕元に立ちつくす幽霊であるが、とくに襲ってくるということもなく、ただただ立っている。俺はそれを寝転びながら見上げている形なので、なんだか不思議なことになってしまっている。

とりあえず、俺も起きようか。眠気も吹っ飛んだし。

……しかし、起きられるのだろうか？

そういう怖い話では、金縛りとかなんとかで身体の自由がきかないということもよく聞く話だが……。

「あ、起きられたわ」

普通に身体を起こすことに成功。よかった。動けなかったらどうすることもできなかった。

さて、と。俺は布団の上に座って、幽霊を見上げる。俺が動いたことにも、この幽霊はとくに何か反応を見せるわけでもなく、ただ佇たたくんでいる。

……そもそも、俺のことは見ているのだろうか？

黒い髪が長く、しかもそれが顔を覆ってしまっているために、彼女の顔も分からない。

女……ということが分かるのは、彼女が薄汚れた白いワンピースを着ており、しかもそ

の身体の起伏が富んでいるからである。整形手術した男性、と言われてしまえばどうすることもできないが。

少し考えが逸れてしまったが、俺はこれからどうするべきだろうか？

大家さんは戦ったり抵抗したりすることなく、ただ逃げると言っていたが……本当に逃げてしまっても大丈夫だろうか？

おそらく、俺はもう彼女に認識されているだろうし、むしろ逃げた方がヤバいのではないだろうか？

というよりも、逃げたところで行く先がない。大学はもうすぐ始まるし、今更50円以上の家賃なんて払う気にもならない。

「あの……立ってないで座ってみない？」

ということ、俺が選んだのは対話であった。

まあ、幽霊と肉弾戦して勝てるとは思えないし……まだ何か不利益なことをされたわけでもない。

話合いで解決できるんだったら、それに越したこともない。そんな考えから声をかけたのだが……。

返ってきたのは無言である。

いや、まあ幽霊に会話を求めるというのがおかしいのかもしれないが。

しかし、困った。もし、有無を言わず殺しにかかってこられたらどうしようか。

一応抵抗はするだろうが、何もできないで殺されるかもしれないな。

「えーと……近づいてもいい？」

それでも、俺が逃げなかったのは、幽霊という存在が珍しかったのか、あるいは……なんかこの幽霊にそえられるものがあつたからか。俺は立ち上がって幽霊に尋ねてみる。

やはり、返答はないのだが、おそろおそろる身体が触れ合えるほどの距離に迫っても、とくに弾かれたり嫌がられたりということとはなかつたので、受け入れてはくれるようだ。

そこで、俺は幽霊を観察してみることにした。

こんな体験、もう二度とできないかもしれないし、どうせ殺されるんだつたら楽しんだ方がいいだろう。

「身長は……女としては高い方かな？」

俺も身長が高い方なので、それでも顎下あごくらいに幽霊の頭頂部がある感じ。

「黒い髪の毛は長いよな。感触は……」

女の髪は命とも言ううし、触ったら怒られるかなとも思っていたのだが、おそろおそろる触つてみればとくに反応を見せることはなかつた。

……え？ 本当はただ立っただけなのか、この幽霊？

まあ、殺されないならありがたいのだが。

髪の毛を触ってみるが……うーん、ボサボサだよな。

ただ、脂でギトギトというわけではないし、ポタポタと水に濡れているわけでもないの
で、それらに比べると全然マシか。

別に俺はサラサラの髪の毛の女しか興味持てないとか、そういうわけでもないし。

さて、一番重要な幽霊の顔なのだが……長い髪の毛で隠れていてさっぱり分からん。

「髪の毛、上げてもいい？」

そんな風に聞いても、やはり幽霊から反応が返ってくることはなし。

しかし、拒絶されるような気配もないんだよなあ……。本当、なんだろう、この幽霊。

ただ、顔が血だらけとかだったら流石さすがに俺も興奮できないので、やっぱり顔は重要だよな。

「失礼しまー……おお」

あまり怒らせないように、ゆっくり優しく髪をかきあげると……そこに顔はなかった。

のっぺらぼうとか、マネキンみたいになつていたりとか、そういうことではないのだが……

……。確かに、そこには顔があるのだろう。目、鼻、口があるはずだ。

しかし、何故か俺の目は……というより頭は、その顔を認識することができなかった。

見えているはずだ。それなのに、認識することができない。

いやー、こういう不思議な現象を目の当たりにすれば、やはり彼女が幽霊だということがハッキリと分かってしまう。

「んー……？」

ずっと無口だと思っていたが……俺は幽霊の口の位置に耳を近づける。

……何か喋っている？　あまりに小さすぎて、これほど近づいても何を言っているか分からないけど。ブツブツブツブツと、何かを呟いている。

……独り言は怖い。

「見られないんだったら仕方ないか」

そう言っつて、今度は幽霊の身体に目が行く。

「おー……肌すっぴえ綺麗。真っ白……てか青白い？　白人よりも白いよね」

幽霊の腕を持ち上げて、近くで肌を確認する。本当に綺麗で、傷もシミもまったく見当たらない。

ただ、病的とも言えるほど真っ白だった。

……死んでるから当たり前か。

「さて、と」

俺はじつと幽霊を見る。観察……別にここでやめてしまってもいいだろう。

だが、俺にはどうしても気になることがあった。

それは、薄汚れた白いワンピース越しにも分かる、この幽霊のスタイルの良さだ。

正直に言おう、めっちゃ見たい。胸もかなり大きそうだし、お尻も良い曲線を描いている。

今まで女性経験がまったくないというわけでもないし、それなりに裸のお付き合いをしてきたが、この幽霊のスタイルの良さはダントツである。

裸が見たい、なんて言えば普通に殺されそうなのだが……今のところ、髪の毛を勝手に触ったり持ち上げたりしても、殺されそうにない。

……試してみてもいいだろう。

「ねえ。ワンピース脱がせたいから、万歳してくれない？」

「……反応なし、か」

それなりに勇気を出して言ってみたのだが、幽霊が反応を見せることはなかった。

ということは、俺が殺されるということもなかったというわけだ。

明らかにセクハラなのは、幽霊だって理解しているはずだ。

……これ、いけるんじゃないかね？

弱点をピンポイントに男根で突いてやれば、あっけなく身体をビクビクと震わせ力を抜いた。

抵抗する力もなくなったので、遠慮なく腋に溜まった汗を舐めとった。

匂いと味……それらを受けて、腔内に収められている男根が大きくなった気がした。

「ふー……」

幽霊の汗を堪能して、俺は改めて身体を上げて彼女を見下ろした。

ビクビクと小刻みに震えるエロい肢体。

汗も浮かび上がらせて、青白い肌が光っているように見える。

腔内はキュンキュンと常に締め付けてきており、彼女が二ケタ以上絶頂を迎えていることを教えてくれる。

……そろそろ、ラストスパートだな。俺も出したいし。

俺は再び、ゆっくりと幽霊の身体に覆いかぶさり、彼女の頭を抱いて耳元で囁いた。

「今から、お前に中出しするから。お前もそれでイけよ」

幽霊は、それだけで身体をビクンと震わせた。俺はニヤリと笑って……。

「おう……っ？」

全体重をかけるように、遠慮なく幽霊の身体に押し掛かった。

少し幽霊の腰を上げさせ、動きやすくする。

ついでに、彼女の背面に腕を回して、強く強く抱きしめる。

圧迫感があるだろう。しかし、それ以上に幽霊はこれからされることを想像して、逃げ出そうとする。

だが、逃がさない。エロ男からエロ女は逃げられないのである。

「おごあつ♥」

ジュプ！ と男根を深く突き入れた。

そして、そこから……。

「おっ、おっ、おっ、おっ♥」

ジュプ、ジュプ、ジュプ、ジュプ！

幽霊の身体を全身で押さえつけ、腰だけ激しく振りたくる。

まるで、上から下に叩き付けるような激しいピストンだ。

ゴリゴリと膣壁を抉られ、子宮口を圧迫され、幽霊は獣のような喘ぎ声を上げる。

彼女の投げ出されている四肢がビクンビクンと打ち上げられた魚のように跳ねているが、全身を押さええているため逃げ出すことはできない。

これは、種付けプレスと呼ばれるもの……らしい。

デブが小さい体躯たいくの女にするもののようなのだが、残念ながら俺はデブではない。

だが、それでも幽霊は逃げ出すことができなかつた。

男に力で押さえ込まれ、男根を突き入れられ、快楽を教え込まれ、幽霊はただただ喘ぐのであつた。

「おっおっおっおっ♥」

ジュプジュプジュプジュプジュプジュプ!

折れてしまいそうなほど強く抱きしめる。

ピクンピクンとのた打ち回る幽霊の肢体を抑え込み、激しく男根を打ち付ける。

もはや漏らしているのではないかと思うほどの愛液を分泌させ、布団のシミを増やしていく。幽霊はひんやりとした心地いい肉布団になつていた。

俺の身体に当たつて潰れる豊満な乳房の感触も気持ちいい。

「おい、キスできるか?」

俺はそう言つて顔を近づけ、舌を垂らす。

正常位はキスをしながら打ち付けることができるのが良いのだ。

しかし、残念ながら幽霊の顔を見ることはできないので、口もどこにあるのか分からな

い。だから、幽霊からキスをさせることにした。

少し逡巡する仕草を見せる幽霊であつたが……。

「おぐあっ♥」

強く腰を打ち付けることによって、彼女の思考能力を奪っていく。

「ほら、早く。気持ちいいぞ?」

その言葉に後押しされたのか、彼女はおずおずと顔を近づけていき……。

俺の舌に、ひんやりとしながらぬめつとした感触があった。

これが、幽霊の舌か。

おずおずと慣れない様子だったので、幽霊がリードするということではできなさそうだ。

まあ、そんなことは期待していない。どこに口があるのか分かれれば、もうこっちのもの

だ。

「んぶううっ!!」

じゅる、じゅるるるるるるっ!

さらに、彼女の身体にずしっと押し掛かり、舌を搦め捕って唾液を吸い取ってやる。

幽霊の冷たい口内をむちゃくちゃに舐めまわせば、まだビクビクと身体を跳ねさせる。

「んぶうっ! んぐっ、んんんんんん♥」

口を塞ぎながら、腰を激しく打ち付けて男根を出し入れする。

もう随分と精液は上がってきている気がする。俺もそろそろ限界だ。

幽霊はもう数えきれないくらいイッているだろうし、そろそろ良いだろう。

「もう出すから、両腕と両脚、俺の身体に回せ」

俺がそう命令すると、幽霊はやはりおぞおぞとしながら、しかし忠実に俺の言うことを聞いて、彼女は両腕を俺の首の後ろに、両脚を腰に回してきた。

これで、より密着することができる。

「んぶうっ、んおっ、おっ、ごあっ♥」

ジュプジュプジュプジュプ!

口を塞がれているため、幽霊からはくぐもった声しか聞こえない。両者ともに汗をかいているが、このぬめぬめすらも気持ち良かった。かなり苦しいはずだが、幽霊はビクビク

と身体を震わせていた。相手のことを考えず、本気で強く抱きしめる。かなり苦しいはずだが、幽霊はビクビクと身体を震わせていた。

豊満な乳房が胸板で潰れ、ひんやりとした肉布団を楽しんで……。

「おあああああああああ♥」

ピュルルルルルルルルルル!!

ドチュツ! と子宮口をこじ開け、直接精液を注ぎ込むのであった。

ビクンビクンと、俺の身体の下で柔らかく冷たい肢体を跳ねさせる幽霊。元々冷たいのに、汗でさらに冷えている気がする。

だが、その豊満な乳房や肉付きの良い身体は、抱き着いていて心地がいい。



まだ結果も聞いていないのに自慢げなシキの頭をポンポンと撫でながら探す。

えーと……番号がこれで、当選一位の番号が……。

……あれ？

目を擦ってもう一度確認してみる。

……あれ？

おつかしーな。俺の目、なんか変になってる？

なんだか、シキの持っていた宝くじと当選の番号が一緒のような気がするのだが……。

「お、一位じゃな。まあ、当然じゃ」

なかなか結果を言おうとしない俺に焦れたのか、俺の頬にプニプニの頬をこすり付けるようにしながら確認したシキは、やはり自慢げに頷くのであった。

一方の俺はシヨック死寸前である。

え？ 一位？ なんで？

「いや、僕、座敷童じゃぞ？ 幸運を与える可愛い存在なのじゃ」

「人殺ししようとしていたのに？」

「それは置いておけ」

……しかし、確かに座敷童というのは幸運をもたらすというのは、あまり幽霊とか妖怪

に詳しくない俺でも知っている。

だが、ここまでとは……。冗談だろ？

「ほれ、はした金にはなったじゃろ？ 豪遊してもよいぞ」

「いやー……」

正直、まったく思いつかない。学費に充てるくらいか？

「お前凄くないか？ こんなこともできるのか……」

「儂は座敷童じゃしな。これくらいできなければ、座敷童としての意味がないわ。まあ、もつと褒めて良いぞ」

ふふんと笑って頭をこすり付けてくるので、大きな花飾りに当たらないように注意しながら髪を撫でる。

霊子さんと違ってサラサラだ。あっちのボサボサ感も好きだが。

「じゃが、儂が出て行った家は没落する。気をつけろよ、小童。儂の気を損ねんようにな」
ニマニマと笑いながら、そんなことを言ってくる。

あー……：そういうえば、座敷童ってそんな感じだっけか？
なるほど、そういうことなら……。

「よし、霊子さんに相談してみるか」

「あの地縛霊を出すのはやめろ!!」

すぐさま反応が返ってきた。

「あやつめ、あんなに若い幽霊のくせにとんでもない力を持ちおって……。いくら死なんとはいえ、ああも何度も壁に叩き付けられたら苦痛じゃ！」

ブルブルと膝の上で震えるシキ。

どうやら、力は霊子さんの方が強いらしい。

幽霊というのは生きてきた時間の長さで力が変わってくるらしいのだが……。霊子さんは特別だということだろうか？

— 正直、幽霊の力関係には興味がないのであまり分からないのだが。

「まあ、確かに機嫌は取っておいた方がいいな。何かしてほしいことはあるか？」

「うーむ……」

悩む仕草を見せるシキ。俺にできる範囲で頼むぞ。

「そうじゃなあ……。地縛霊が飯を作っておるじゃろ？」

「ああ、ありがたいことにな」

シキの言葉に台所へと目を向ける。

そこでは、薄汚れたワンピースを着た霊子さんが料理をしてくれていた。

まな板を包丁が叩く音、ぐつぐつと何かが煮込まれる音……。良い匂いもしてきて、本当実家みたいな安心感がある。

誰かに飯作ってもらえることって、幸せなんだなあ……。

作ってくれているのが幽霊というのは、なかなかないと思う。

「儂も飯が食いたい」

「……食べればいいじゃん？」

「いや、そうじゃなくてじゃな……。というか、あの地縛霊、儂だけ露骨に無視するぞ。飯も儂の分を作ってもらったことないんじゃないか？」

あー……。そうだっけ？

どうにも、霊子さんとシキの相性がよろしくないようだ。二人とも、俺との肉体的相性はバッチリなのにね。不思議だね。

「じゃあ、俺から霊子さんに頼もうか？」

「いや、いい。小童のお願いは断らんじゃろうが、その後儂に矛先が向く」

そうか？ まあ、時々シキが霊子さんにポルターガイスト的な力でブツ飛ばされているのは見るけど。

「儂の飯と言えば、分かるじゃろ？」

そう言うのと、シキは俺の首の後ろに腕を回して抱き着いてきた。

うーん……。霊子さんと違って豊満な胸が当たらないのが寂しい。

まあ、シキも小さいとはいえちゃんとあるし感度も良いしいいんだけどさ。

「よし、じゃあするか」

「うむ。……手加減はしろよ？ フリではないからの？」

フリです、分かります。

「よし、じゃあ勃たせてくれ」

俺は自然と声を小さくしてシキにそう言った。美味しい料理を作ってくれている霊子さんにばれないようにするためである。

というのも、どうにも彼女はシキのことを快く思っていないようなのだ。俺とシキがやることも、あまりいいことではないようだ。

こっそり隠れてやるというのも興奮するからいいんだけどさ。

「うむ、任せろ」

シキはグイグイとズボンを引っ張って脱がせようとするので、腰を浮かせて手伝う。すると、半分勃起しているような逸物が露わになる。

「なんじゃ、期待しておったのか？」

「まあな」

ニヤニヤと笑うシキに、とくに取り繕う必要もないので正直に頷く。

彼女のような口りに奉仕されることを想像すれば、嫌でも背德的な高揚感に襲われる。また、霊子さんと違って顔が認識できないということもないことから、奉仕の様子がし

つかりと見ることが出来るのも興奮する一要素となっている。

まあ、靈子さんのように見えない場所で奉仕されるといいうのも、それはそれで気持ちがいいのだが。

「胸見せてくれ。さっさと勃つし」

「儂みたいなちゃんまいのでも興奮するのか……。小童、儂以外のロリには手を出すなよ」
「出さねえよ」

本物のロリは精神的にも幼いだろ。そういうのには反応しないんだ。シキのようにロリ婆なら余裕なのだが……。

逸物を唾えようとしていたシキを立たせ、着物を脱がせる。

案の定、下着を身に着けていないのですぐに裸体が露わになる。

靈子さんとは比べものにならないくらい、小さな胸の膨らみ。

ツンと上を向く桜色の乳首に引っ張られるようにして膨らんでいる小ぶりの乳房だが、感度も良いので俺はお気に入りである。

「あつ、く……馬鹿者。儂が勃たせると言うておるのに、貴様が儂を弄つてどうする」
乳首をクリクリと弄れば、ガクガクと腰を震わせて頬を膨らませるシキ。

本当に感度良いな。そんなに反応してもらえれば、男として嬉しい。

「おう。じゃ、よろしく」

彼女の頭を持ち、ゆっくりと股間に近づかせる。

「相変わらず臭いのう。頭にズガンとくる匂いじゃ。あーむ……」

スンスンと鼻を鳴らして匂いを嗅いだ後、シキは精一杯口を開いて男根を含んだ。じゅるじゅると熱心に唾液の音を立てながら、口で奉仕してくれる。

少しキツイ目がトロンと蕩け、うつすらと赤く染まった頬は可愛らしい。どんどん大きくなる男根によって、その頬が形を変えるのが面白い。

やはり、気持ち良さもあるが、心の充足感が大きいな。奉仕されていると、男としての征服感で満たされる。

「んっ、ちゅっ、んぶっ」

声を漏らしながら口内で男根に奉仕するシキの頭を優しく撫でる。

彼女を見下ろせば、小さな乳房も見える。その光景もなかなかのものだ。

「ぶはっ！ 流石に、大きくなるのは早いのお。変態小童」

「指ではじくのやめろ」

口から男根を離れたシキは、ニヤニヤと笑いながら完全に勃起した逸物をピンピンと指ではじいてくる。地味に痛いからやめろ。

しかし、シキの唾液でテラテラと光っている男根は、なんとも淫靡であった。射精には至らなかつたが、気持ち良かった。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>